

学会設立特別座談会 No. 6

出席者

宇佐美德子 (筑波大)	高倉かほる (ICU)
谷口美恵子 (名大)	原沢あゆみ (東大物性研)
牧田 知子 (原研)	松尾 欣枝 (奈良女大)
大井みさほ (学芸大) 司会	(1990年12月1日収録)

大井 (司会) 今まで放射光学会の座談会という、世代別というので20代とか50代とかいろいろなのがあって、今度、女性だけの座談会をしようという企画になったそうです。女性研究者の現場からの率直な意見を述べてほしいという話だったので、今日これから皆さんに話していただいてどういう話になるか、話してみないとわからないという感じがいたします。まず最初に皆さんに自己紹介をしていただきたいと思いますが、まず私からしたいと思います。

今日、司会をすることを引き受けました東京学芸大学の物理の大井と申します。東京学芸大学に移ってきたのが85年4月です。その前は筑波の計量研におりました。私の専門はレーザーですけれども、PFではX線とレーザーを組み合わせた仕事を3年ぐらい前から始めています。

宇佐美 筑波大学の生物科学研究科の宇佐美と申します。このなかでは私が唯一の学生なんですけれども、PFには5年前ですか、大学院に入る前に1年間、研究生をしていたのですが、そのころから共同実験をさせていただいています。専門は放射線生物グループに入っていて、今やっていることは生物のなかにある特定の原子の吸収端をねらって、単色X線を照射して、生物効果を調べています。大きく言ってしまうと放射線の生物効果のメカニズムを明らかにする手掛かりになら

ないかなと思って、ずっと実験をやっています。

松尾 奈良女子大学の物理の松尾です。PFに実験に行きはじめてちょうど4年になります。いちばん初めは物理学会の放射光関係のセミナーに参加して、面白そうだなというので始めたんです。専門は金属物性で、X線を使って合金の相変態の実験をやっています。

牧田 日本原子力研究所の大型放射光施設計画推進室に勤務している牧田と申します。大学院在学中、2年間原研の原子炉でニュートロン(中性子回折)の実験をしていました。大学院を終えて医大の物理学教室で教務職員を4年程していましたが、その間はX線や中性子線から遠ざかっていました。やっと今年(90年)の1月に原研に戻る機会を得、それから放射光を始めました。専門は金属物性なんですけれども、今は、AR(高工研)の超高圧の装置を使って、イオン性液体の実験をさせてもらっています。

高倉 国際基督教大学の教養学部の物理教室で仕事をしています高倉と申します。出身は立教大学なんですけど、学部を出てすぐ助手として入りました。1982年から物性研のシンクロトロンラディエーションを使って、真空紫外線によるDNAへの照射効果を物理化学的な立場から研究しています。放射線生物学が専門ということになります。

P Fのほうは1986年ぐらいだったと思いますけれども、そのころから時々来て、こちらでは、軟X線によるDNAへの照射効果を調べてきました。宇佐美さんにはずいぶんお世話になっております。

原沢 物性研究所の技官をしております原沢と申します。2年前に物性研に就職しまして、筑波に住んで、P Fに常駐して、主にBL-19の立ちあげをやっています。

谷口 名古屋大学の物理の谷口です。主にやっているのは生物物理です。P Fは立ち上げから数年TMVのX線小角散乱をBL15で行ないました。現在は岡崎の分子研UVSORで二つの課題にとりこんでいます。一つは共同実験でX線顕微鏡の開発とその生物への応用、もう一つは筋収縮に関する時分割蛍光分光とイメージングの研究課題です。今は両方のチームで満杯ですから高エネルギーP Fのほうへはしばらく行っていません。近いうちに行こうとは思っていますが。

研究室のほうでは超高速カメラを偏光顕微鏡にドッキングさせて筋収縮における高速分子運動の研究を行なっております。近い将来この高速カメラシステムを、放射光をつかって行なう計画をもっております。

大井 ひととおり自己紹介が終わって、これからいよいよ女性っぽい話をしなければいけないのでこれは大変だなと思うわけです。(笑) たまに意識することはあるかもしれないけれども、毎日、女性だということを意識して働いている人はほとんどいないはずですよ。

今まで仕事をやっていて女性だからすごく大変だなということなんか話しますか。

宇佐美 逆によかったこととか。

大井 そうですね。得したこととか損したこととか。

今、宇佐美さんがいちばん若い？

宇佐美 いえ、原沢さんです。

大井 研究者になりたての若い人たちとわれわれ

とではだいぶ違いがあると思うんですけど、学生時代は女だから損をしたということはないかもしれないけれども、どうですか。

宇佐美 私は学部的时候も大学院もずっと生物だったので、たぶん物理に比べると女性の比率が多いと思うんです。だから特に女性は少数派だとかそういう感じは持っていませんでした。特に差別を受けたとか損したとか得をしたことはあまりないような気がします。そうすると話が面白くななくなっちゃいますね。(笑)

大井 まだ就職をしていないわけだからわからないわけですね。

宇佐美 社会に出たらまた違うと思うんですけど、まだそういう経験もないし、そういう話を先輩の方々に今まで経験されたことからお聞きしたいと思って。

谷口 もう就職も決まっているそうなのですが、これからやってやろうという、夢はどんなことかしら？

大井 就職先はどこですか。

宇佐美 放射光です。高工研の放射光の測定器の助手になります。

大井 来年の4月からですか。

宇佐美 はい。これから女性が社会に出て行きやすいような世の中に徐々になっているような気がしていますけれども、正直言って不安もたくさんあります。特に放射光みたいなところだと拘束される時間が長いというか、べつに拘束されているわけではないんですけど、皆さん、夜遅くまで研究所にいますので、そういうなかで、たとえば私がこれから子どもを産むとか、家族ができれば、家族はどうするんだろうとか考えると、あまり深く考えたことはないんですけど、ちょっと不安な気がします。

大井 谷口さんは私と同じぐらいですけども、やっぱり大変だったでしょう。

谷口 研究時間に関して言えば今でも遅くまでやっている方でしょうね。放射光の特殊性もありま

すが、どこにいても研究に必要な時間は変わらないんじゃないかと思えます。

大井 お子さんがいらっしゃるんですね。

谷口 2人います。

大井 そういうときはどうやって乗り越えました？

谷口 必要に迫られれば生活の知恵がでてきますよ。今は、結婚して子どもができて、それでかつ放射光研究にも参加していけるようにするにはどうしたら良いかを男の人も考えている時代ですから。

大井 最近男の人もそういうことを一生懸命考えているわけね。

谷口 ええ。宇佐美さんが就職ができたということは画期的なことだと思うんです。

宇佐美 そうですかね。(笑)

大井 もっとふつうの研究所だったら簡単だったのかもしれないけれども。

宇佐美 放射光施設というのは特別だというのがありますね。

谷口 日本ではですけどね。(笑) そういう不安というのは相手とも未知なわけです。子どもがいて、かつ放射光施設のようなビッグサイエンスを行なう場所に就職してというのはこれから経験することですから、女性の方で先にそういうことを少し考えておくといいでしょうね。昨日、UVSORの研究会のあとの懇親会でいろいろな話が出ていました。その中の一つを紹介すると、若い学生さんが、結婚したてで1歳ぐらいの赤ちゃんがいるみたいなんです。だから3時ごろちょっと帰ってまたやってくるんだけど、やっぱり託児所がいるというわけです。作らなければいい仕事をする人に来てもらえないのではないかって男の人時々はそのようなことを考えると言うんです。

(笑) ちらちらとは頭をかすめるけど、しょっちゅうは考えていないと!!。やっぱりそれは必要になってきた女性研究者が理解ある周りの人をいい意味で巻き込んで、当たり前にするればいいんじゃないかと思えます。

ないかと思えます。

もう一つはもっと簡単なことなんだけど、放射光実験施設のすぐ近くに女子トイレがないことです。それも必要ですね。今度、UVSORでは増築するのでそういうのはどうしたらいいかということも出ていました。そういうときに就職したての女の人がいるということは強いですね。こういうことはタイミングをのがさず発言して、うまく獲得していったほうがいいんじゃないかと思えます。むしろ男の人の方が、考えなければいけないかなと言っていますから。

大井 今、筑波は女性の研究者が100人以上いると思います。託児所なんかは24時間保育もあるし、預けっぱなしという人もいます。(笑) 預けっぱなしだけでも、なるべくしょっちゅう会いに来たり引き取りに来てくださいということです。だから夜中に行ったりするらしいですけど、それだと安心して仕事ができますね。朝何時から夕方何時までと決められたら研究者はやっていけないんです。そうすると24時間いつでも安心して…。24時間営業のセブンイレブンとかファミリーマート式の託児所が筑波みたいのところだったらできていいんじゃないかと思うんです。分子研で作るといって大変かもしれないけれども。

谷口 そこに女の人がいたらそれを考えて欲しいという声になるわけです。そのときに適切に発言



大井みさほ氏

できる場があるわけです。

宇佐美 でもまだ少数派でしょう、特に放射光の世界では。だからそういう声がうまく受け入れられてもらえるかというのがありますね。

高倉 男性の方でも奥様はいらっしゃいますよね。そしてその奥様は、今の時代は家にいるという確率が比較的少なくなってきて、皆さん、外で働くようになってきていますね。そうしたら奥様が、もっと仕事をしたいから子どもの面倒をみてくれとか家事を負担してくれということが、家庭のなかでも出てきているはずですよ。私は子どもが2人いて、下が小学校6年生で、上の子が今は16歳ですから、16年前からその苦勞が始まったわけです。私たちの時代は、女性が社会で働く事に対する理解が、今に比べたらずっと少なかったと思います。

大井 女の人が全部自分で解決しなければいけないかった。

高倉 その分、女が頑張ってきて、頑張ってきたからここまで来たというのがわれわれの時代だったと思うんです。今はそれを頑張らなくても社会の意識が高まってきている状況があって、すごく恵まれていると思うんです。

松尾 結婚という点では私なんかは逃げちゃったから。(笑)

高倉 それはべつに逃げるということではないと思うんです。

松尾 ほんとうに仕事が面白い時代が結婚して子どもを持つという年齢と重なっちゃうんです。それをがむしゃらに仕事をやっていて、ふっと気がついたらいろいろなことが終わった後だったというわけなんです。(笑)

高倉 だから逃げるということではないと思うんです。私も頑張ったと言ったけれども、正直言って8割とか7割とか仕事を減らしているという事実があります。それをたとえば10割やりたい人は10割やる、7割で我慢するという選択があったと思うんです。でも10割仕事をして、そして家庭人

としてもやっていくというのが未来の女性の時代ではないかなと思うんです。

大井 私が最初、就職が決まってスタートするときに強く考えていたのは、とにかく研究者としては優秀な研究者でありたいけれども、学校の成績のA、B、Cで言えば、Cでいい。でも合格点は欲しいと思ったんです。それから家庭の主婦になるとしてもその点もCでいいから、両方とも合格点は取りたいというか、ふつうの人がやることはすべてやりたいと思っていました。

いま思えばかわいそうな気がするけれども、就職したときにこれからどういう仕事をやっていこうという抱負はなくて、辞めなければいいという意識しかなかった。最初の20年は辞めないで、何がなんでも頑張ろうというのがあって来ちゃいました。男の人だったら、自分はこういうことに興味をもっているからこういう仕事をしたいとこの研究所に入ろうとかいったことがあるのかもしれないけれども、女性の場合、そんなに選ばなかったんです。女の人でも採ってくれますというところがあれば非常にありがたいと感謝して入って、そこで給料をもらっているんだからそれにふさわしくちゃんと働かなければいけないというか、とにかく頑張ろうという意識のほうが強くて、それは寂しい気がしますね。(笑) 今だったらもう少し仕事に夢を持って就職できたかもしれませんね。

谷口 私の場合はあんまりそういうのはなくて、早く言えば仕事が趣味ぐらいに好きなんです。たとえば大学院時代でも終バスで帰ることが多かったし、日曜日でも必要があれば出て行きましたから。逆に考えれば、若いと言ってもすごくオーバーロードなんだけど、仕事が好きなんです。遅く帰って子どもがかわいそうじゃないかというふうにはとらえていないんです。ただし、子どもはすごくかわいいから、居る時にはものすごくかわいかります。

大井 居ないときはどうしているんですか。

谷口 子どももまだ完成はしていないけれども、

1 個の人間だから、そういうふうに掲げたほうがいいと思います。

宇佐美 でもすごく小さいときには一人では置いておけませんよね。

谷口 保育所なんかはもちろんなかったから作ったんです。

大井 保育所を作るところからしたわけですか。

谷口 そうです。もちろん私だけで作ったわけではなくて、けっこう仲間が居ましたので作ったんです。当然3時とか4時に迎えにはいけないでしょう。6時ぐらいまで預かってもらうということ園長先生と折衝したりしたんです。そうすると向こうも労働者ですし、こちら労働者でわかる面があるんです。それで話し合っ、それこそ向こうも涙をぼろぼろ流したり激論になることもありました。お互いがその立場をわかっていくと延ばすような制度を取り入れてくれたんです。どんなふうに発展したかは今は知らないのですが、最初は4時だったのを6時にしていただきました。6時までだったら普通にできるでしょう。今だったらもっとできると思います。今はそういう空気もありますし。だいたい採用するというのがすごい変革だと思います。だからなかで変えていってほしいなと思います。

宇佐美 話し合っ、やっぱり男性には気づかないことってありますよね。



谷口美恵子氏

谷口 さっきのトイレの話ですけど、ある男性の共同トイレでいいんじゃないの? という発言に対して、ほかの男性が、それは遅れてる!?!と書いていましたからね(笑)。

松尾 K E Kの宿舎の1号棟と2号棟は共同ですよ。

牧田 共同というよりも、トイレには男の人用の青マークしか張ってないような気がしました。

大井 最初、知らなくて入ったら男の人が入ってきて、あ、これは困ったと思って、息をひそめてずっと静かにして、いなくなっらしいということになってから出たんです。(笑)それからトイレまで行くのにちょっと面倒臭いですよ。

松尾 夜中に1階の女子専用トイレまで洋服を着替えて下りていくのは大変です。

高倉 1号棟は全部青(男性)マークなんです。でも2号棟は青(男性)と赤(女性)の共同のマークなんだそうです。

松尾 学生がトイレがない、トイレがないと騒ぐから、あるはずよと言ったら、でも、マークがないと言っていました。(笑)

高倉 女子用トイレは1階に小さなのが一つあるんです。掃除道具と一緒にあれだけなんです。だから私なんかはもう当然の権利だと思って男性用トイレを使っちゃいます。(笑)

松尾 おそらくだれも気がついていないんでしょうね。言わないものね。

高倉 それはやっぱり女性じゃなくちゃ気がつかないですね。

宇佐美 逆に男性から見て、男性がトイレに入ったときに個室のなかから女の人が出てきたら、ビクッとするというか、いやじゃないですかね。

牧田 案外女の人は平気で、近ごろの若い男の子がいやがるかもしれませんね。

大井 今の中年の男の人たちはなんともないんでしょうけれども、(笑)20代の男性はビクッとしていやかもしれないですね。男性もだんだん優しくなってきたから。

高倉 それに関連して仮眠室はぜひ男女別にしてほしいですね。われわれ、夜中にずっと実験していますから仮眠室はすごく大事ですね。

松尾 長椅子で寝ころがっても、なんとなく足がニュッと出たりして。

大井 ほんとに眠いときはふつうだったらしないようなかっこうで椅子の上で寝ちゃったりしちゃいますから。

松尾 私は山小屋でそういうのはしょっちゅう経験するから、どこでも寝られますけど。でも学生を連れていくとすごくいやがりますね。

大井 学生というのは女子学生？

松尾 私のところは全部学生は女性だから。

高倉 私も女子学生を連れていったことがあるんですけど、やっぱり寝ませんね。私みたいになれば寝るんでしょうけど、やっぱりうら若い女性は寝ませんね。

大井 うちの女性は寝てしまいましたね。(笑) 出番を待っていたらなかなかないというので、長椅子の上で寝ているんです。それで、ほら、起きて働いてと言ってもだめなんです。(笑)

松尾 お風呂が自由に使えないですね。

高倉 お風呂はいよいよにならないと使わないということですよ。

宇佐美 宿舎のお風呂というのは女性用のお風呂はないんですか。同じお風呂を時間で分けて使っているんですか。

大井 ふつうの家庭用ぐらいのお風呂場が一つあって、これは入ってカギを掛けて、「使用中」という札にしておけばだれも入れないから、それを使えばいいわけです。

高倉 あそこは夜中もずっとお湯が出ると聞いていますけど。

大井 夜おそく入ったことがあります。

高倉 ただシャワールームは遅い時間になると、お湯がありませんよね。各階にシャワールームがありますけど、夜中の1時、2時に帰ってきてシャワーを浴びようと思っても、絶対お湯が出ない



高倉かほる氏

んです。洗面所もお湯は出ませんね。いつもお水で顔を洗うんです。

大井 シャワー室のドアの曇りガラスが透けるのがすごくいやね。外からなんとなくシルエットでわかるから。あそこのシャワー室の曇りガラスはまったく不透明なものにしてもらわないと困りますね。それは女の人もいやだけど、男の人もいやなんじゃないかしら。

松尾 ああいう大規模な共同施設なのに、女性のための配慮はないですね。

牧田 造るときに女性の研究者がいるということが思い浮かばなかったんでしょうね。

高倉 図面を引っ張るところにだれもいなかったんでしょうね。

原沢 核研の宿舎のほうは私も泊まったことがありますけれど、もっとひどいですね。女の人のごとはほとんど考えていなかったんじゃないかと思っています。

谷口 そんなことを言っていましたよ、ぜんぜん考えていなかったって。(笑)

原沢 これから造るものはそういうことを考えて造るでしょうけれども、今のも変えてほしいですね。言えば変えてくれるのではないかと期待してはいるのですけれど。

松尾 変えてもらえるんじゃないかと思っています。最近、たとえば防衛大学でも女子が入るように

なると、全部の施設に女性用のものを付けるでしょう。少数でも必要なものは必要で、少しだからいらぬというものじゃないからね。(笑)

高倉 正直言ってトイレの問題と仮眠室の問題ぐらいで、それ以外は仕事上で女性だからといって悔しい思いをしたということは、ぜんぜんありませんね。

大井 そうですね。研究していただけたら無いですよ。

松尾 そういう場を与えられるというか、研究者になれるかどうかのチャンスという意味での入口ではあるけれども、なってしまうと、毎日の生活のなかで自分が女性だからって……。この座談会の前に今までの座談会の記事をずっと読み返してみても、個人差と性別の区別がつかなくて、性別という意味で何があるのかなと考えたんです。たしかに入り口はあると思いますけれども、入って研究をやっていただけたら無いですよ。

原沢 体力差などを感じたことはないですか。

大井 私は感じたことはないわね。

原沢 私は朝は規則的に来て、それほど遅くなく帰っている生活をしていますので、時間的には自分のペースでできるのですが、それでも体力的にこんなに違うのかなと毎日感じているのです。

谷口 違うのかなというのは例えばどんなことですか。

大井 男の人と比べて体力が無いように思うんですか。

原沢 ええ。だから皆さん、どうしているのかと思うんです。

大井 男の人と比べて体力が無いなんてあんまり思ったことがなかったわ。(笑)

高倉 それは個人差がありますよね。

大井 自分の夫に比べると私のほうが体力がありますね。(笑) 彼は徹夜はだめだけど、私はできますもの。(笑) 1晩ぐらいなら徹夜をやってみせられます。2晩はだめ。

高倉 重い物を持ち上げるというのはどうかし

ら。やっぱり大丈夫ですか。

谷口 P Fは共同研究体制だから、1人で仕事をするということはないわけで、少なくとも、2人いれば十分できますね。

大井 前は重い物のときは、そばにいる人はだれでも使っていました。(笑)

高倉 頭を使えばいいのよね。

大井 そうそう。お客さんでもいけば、あ、ちょっといい、ちょっと手を貸してくださいなんて。(笑) そう毎日じゃないでしょう。そのときはうんと頭を下げれば、みんな手伝ってくれますよ。お菓子でも買ってあげれば大勢集まりますよ。そういうのはごくたまにのことね。男の人だってあいつときはだれかを使いたくなるから、そんなに感じたことはないですね。

宇佐美 男性、女性と分けて考えるんじゃなくて、力が弱い人がいたら力を貸してあげるというのは当然のことだから、あまり気にすることはないですね。

松尾 重ければ2人で持てばいいですしね。

宇佐美 体格のいい人も私みたいに小さい人も世の中にはいますから。

高倉 宇佐美さんなんかかわいいでしょう。だから装置と装置のすき間を素早く動けるというメリットがありますよね。

大井 それは女の人のほうが多いかもしれないですね。女の人でも大きい人はだめだけど。

原沢 個人差ですね。

宇佐美 原沢さんが言っているのは持久力というようなことじゃないんですか。いま重い物の話になっちゃったけど、たとえば放射光だと夜が遅くなったり、徹夜の実験なんかがあるでしょう。そういうときは、皆さんは大丈夫なんですか。

(笑)

大井 それは大変だと思ってやりますよ。

松尾 ただ与えられた時間が有限だから、時間に追われてやっているというか……。

大井 とにかく覚悟してやらなければしょうがな



牧田知子氏

いと思って意地になってやるだけです。終わったらゆっくり休めばいいと思って。でも1日徹夜したら1日休めば治るわけじゃないんです。しばらく後まで尾を引きますね。だから20代、30代なら勤まっても、年を取ってきたらだんだん勤まらなくなるかもしれません。それは男の人だってそうでしょう。うんと仕事をするなら若いうちに徹夜を続けるとか……。

谷口 みんな仲良くして仲間を作っておけば、いざというときに空いていれば助けてくれますよね。気軽に助けたり助けてもらったりする、それは大事なことだと思います。

松尾 声を掛けてもらってというのではなくて、自分のほうから積極的に入っていくというのは大事かもわかりませんね。こういうサイエンスというのはなかなか一人ではできないですからね。大きなグループのなかで仕事するのは最初はすごく緊張するというか、人の和をうまく作るのに自分では気を使ったつもりです。(笑)それも女性の場合は、若い間はいいんですけど……。(笑)

大井 若い間は大事にしてくれますけど、だんだんそうじゃなくなってきましたね。

松尾 だんだんけむたがられる年齢になってきます。(笑)

牧田 逆に女性が若いと男の人もどうやって扱ったらいいか気を使って、共同研究がしにくいとい

うこともあるんですよ。ある年が過ぎたら気楽になるんですね。

大井 あまり女性を意識しないで仕事ができるからいいというわけですね。

牧田 ただ、それではいけないで、いくら若くても普通にできなければいけないですよ。たしか「放射光学会誌」の3号でPFで実験をしているドイツ人のクラウザーさんが、日本では男性科学者は女性といっしょに働くことに慣れていないので女性のことがよく分らなくて、尻ごみしてしまうのじゃないかって書いていましたね。だんだん仲よしになったらうまくいくんだけど、パッと初めて会ってなかなかコミュニケーションができない時にうまくいかないというところがまだあるんじゃないかと思います。

大井 男の人でも分類すると、女の人をどう扱っていいかまったく分らないから敬遠しちゃうという人、女の人に必要以上に親切な人、普通にしてくれる人と3種類ぐらいに分けられるかもしれません。そういうふうに関わりによって違うから、それに合わせてこっちは付き合い方を変えなければいけないということもあるかもしれませんね。面倒臭いから女性には近寄らないほうが無難だ、避けるほうが楽だという男性がたくさんいても、そういう男性とも付き合わないことには仕事にならないときは付き合いましょう。男性からみれば例外的に女性が一人ポツンといるぐらいだと、その女性にいちいち声を掛けなくてもその男性はそれで用が済んでしまうから、面倒臭かったら声を掛けない。そういう人がたくさんいると女の方は仕事がすごくしづらいわけです。だけどどんどん世代が若くなるにしたがって、そういう男性は減っているんじゃないですか。

宇佐美 私なんかと同世代の男性ですか。

大井 学生時代は一緒だったわけでしょう。だから今さら、この人は女性だなんて意識しないでふつうに仕事ができるんじゃないですか。

宇佐美 同世代の男の子たちが陰でどう言ってい

るかは分からないのですが、(笑)私の付き合いしている範囲だと、必要以上に女性を敬遠したりする人は少ないですね。

大井 そういう人はすごく少なくなっているんでしょうね。だいぶ前にはそういう人がたくさんいたんじゃないかしら。

宇佐美 それは社会に女性がいなかったから、女性との付き合い方が分らなかったんじゃないんでしょうか。

松尾 私は放射光学会のほかに金属学会にも入っていますが、金属学会は圧倒的に男性が多くて、最初のころは会場に行くと1人とか2人で、研究会に行くといつも1人なんです。でも最近わりに増えましたけれども、最初はぐるりの人が気を使っていました。やっぱり少数のところに入っていくというのは大変ですね。

宇佐美 入っていく女性も大変だけど、向こうもどうしていいか分からなくて身構えちゃうところもあるんでしょうね。

松尾 研究会なんかで男性は5人とか6人が1部屋に詰め込まれるのに、私だけ個室というのはありますね。(笑)

大井 どこか泊まりがけで行く時は、いい部屋を一人占めしたりね。

高倉 私は戦後生まれですから、男の子と机を並べてやってきたということもあるし、自分に女性という意識はぜんぜんありません。昔、遊んだ男の子と一緒にという感じなんですけど、男性はそれを意識するんでしょうかね。見渡してみると女は私一人しかいないという場面がけっこうあるんですけど、そういう意識はあまり持ちません。

谷口 こっちはあまり持たないんじゃないの。

高倉 ええ。向こうが持つのかもしれませんね。

原沢 同世代の人たちはあまり気にしていないような気がします。けれど私が最初にPFに行った時、どう表現したらいいのか分からないのですが、壁のようなものを感じてしまいました。気にしないでいようと思ってやってきましたが、やはり

男性社会というのがあるなということを感じました。

大井 私なんか就職したところだと、最初は公務員試験を受けて通産省の計量研に入ったんです。行ったら、女の方は初めて採りますからテストケースですと言われて、私がやることをみんな見ているんです。こっちはみんなに見られていることは最初は知らないで普通に振る舞っていて、ふっと気がついたらみんなが注目していたんです。(笑)

たとえば工作室の何かの道具を使おうと思うと、そばにいた男の人が飛んできてやってくれるんです。私は自分でやりたいのに手を貸してくれるのは迷惑だと思ったり、だから最初のころは注目されたり大切にされたりというのが何年か続きました。そのうち向こうも慣れてきましたね。こっちは最初からそんなに特別扱いをしてもらったつもりはぜんぜんなくて入っていったんだけど、良いことも悪いことも目立つみたいですね。だからちょっと良い仕事をするとうごく目立つのね。悪いことをすると、逆に女の方はだめだと思われちゃうということもありますね。

松尾 対等だとだめだという気は最初に勤めたころはありました。

大井 人よりもよけいにやって良い仕事をしていかなないと、一人前扱いをしてくれないだろうとは思っていました。

宇佐美 それはたとえば男性と女性がいて、同じような仕事をした場合に、女性だからということで認められないということですか。

大井 いろいろな研究所なんかで女の人を採るといっているのはある程度冒険なわけですよ。その人が辞めちゃうかもしれないとか覚悟をして採るわけですよ。採ってその人を仕込むのにお金をかけるわけですよ。それで辞められてはたまらないと思うわけですよ。その人はその人の責任で判断して、この女性を採ろうと決めたわけでしょう。あの人を採ったけどやっぱりだめじゃないかと周りから言

われて批判されるのはすごく辛いだろうから、その人としては採った女の人に人並み以上の良い仕事をして欲しい。そういう期待でみんなから見られているんです。

だから上司に当たる人たちとか偉い人たちは、今度採った人には一緒に採った男性に比べて優れているなど何人かの人に認めてもらうような良い仕事をしてもらいたいと思っているわけです。そういう期待に沿うためには平均より良い仕事をしなければいけない。平均的な仕事しかしないと、採ったほうはちょっとがっかりするわね。(笑) そのうえにその人が変なことをしたりすると、採った人はすごく責任を感じてしまうほどショックなんです。失敗だった、この次は採るのをやめようということになるんです。だから、この次も採ってもらおうとするには平均より良い仕事を必ずするようにしていけば、その次もまた採ってもらえるわけです。

谷口 今でも平均の倍とかそんなものじゃないですよ。少なくとも目標は10倍ですね。

大井 そのくらい意識して仕事をしないとということ、10倍は無理ですよ。

谷口 それはともかくとして倍仕事をするは当たり前で、男の人同士の競争でもそのくらいのことはしょっちゅうあるわけだから。

大井 人の10倍も仕事をしようなんて考えもしませんでしたけど、覚悟はしてやりました。

谷口 今でもそうです。それが自分にできるかどうかは別として。

大井 私なんかの合格点だけ取ればいいなんていうのはだめですね。(笑) だからそれは目標じゃなくて必要条件みたいなものですね。十分条件じゃないの。(笑) 必要条件としてとにかくいろいろやりたいこと全部に最低限の合格点は欲しい。それで欲張って子どもも育てもするし仕事もする。合格点というのは給料をもらっている分は働くとか、子どもが普通に育てばいいのがぎりぎりの線です。それ以上のことはいくらでもあればう

れしいけれども、能力とか時間とか物理的な問題もあるしね。

松尾 実験系で結婚してちゃんと子どもを育ててというのはとても無理だと、私なんかは最初からあきらめちゃいました。時間的に無理だしそういう甲斐性がないし、両立させるというのはなかなか……。

谷口 完璧にしようと思うから無理なんです。だからしなくするというのではなくて、全部に対していい顔になろうというのは無理だと思います。そこは選択になっちゃいますね。と言って切り捨てることはないというか、まずは人として、生きることがいちばん大事なことでしょ。そのための職業であり研究ですから。

松尾 本音を言うと私でもいいという人が一人も現れなただけかもわからないですね。(笑)

谷口 完璧にやろうと思っても物理的に時間が足りないです。研究だけやっても足りないでしょう。アメリカとかヨーロッパで放射光を使って研究している人達はノーベル賞をとっているわけです。それが日本の人だとノーベル賞は偉い人がもらうのであって、自分とはちょっと関係ないと思っている。アメリカなんかは本気で取ってやろうと思っているから、やっぱり意気込みが違うんですね。

日本でも放射光の創設時代の人にはけっこう厳し



松尾欣枝氏

いことを言うんじゃない? 今どきなかなかいいなと私は思っているんですけど。ノーベル賞の三つやそこらは出ないのかなんて、(笑) そういうふうに言う人が少なくなりました。成果はともかくとしてそのぐらいの意気込みがないと。ものすごい予算を使っていますから。

それに関して国際会議で中国の人と話す機会があった時、話題になったのは、P Fで夜中に足しげく実験棟に行くのは、日本の学生より中国の留学生の方が多くに自分たちの目にはうつると言っていました。確かに、中国や韓国の人たちは、日本のすぐれた技術や研究方法を学んで帰ろうと思っているから、もっと真剣です。

今、女性の置かれている立場はそんなに満たされていないわけで、ちょうど中国の学生と同じですね。

大井 中国の学生と日本の女性の立場が似ているということですね。男性のほうは恵まれていてハングリー精神がなくなっているかもしれないから、今すぐく伸びるチャンスですね。(笑)

原沢 人の10倍も仕事をしなければいけないというのは……。

大井 ちょっとぞっとするわね。

原沢 10倍仕事をしなければいけないというのは考えなくてもいいことだと思います。普通にやっていたら同じ仕事ができると思いますから、そういうことを意識して、やらなければいけない、やらなければいけないと思うことが、かえって重荷になってしまうような気がします。

牧田 諸先輩が男性のなかで10倍ぐらいやるという気持ちで頑張ってきてくださったお陰で今があるということですね。やっと今のところまで来たということです。

谷口 いや、現象的にはまだまだ甘いとは思っていません。

大井 前はそうしないとやっていけなかったけれども、これからの人たちはそんなに意識しないで、普通にやっていたらやっていけるんじゃない

い? こんな座談会が無意味な時代に、(笑) これからはなるんじゃないでしょうか。

牧田 なってほしい。普通ならば平均値やっていたらいいものを、今までは女の人には10倍やらなければ認められなかったわけですね。

谷口 数字的根拠をあげてみましょう。放射光学会ができて88年-89年の学会名簿を調べてみますと、女性は360人中13人、3.6%です。そこからいろいろなことが言えます。まず第1に女の人が少ないということです。今の時代は男の人と同じぐらいに恵まれていて差別はないというのだったら、もっと女性研究者の数が増えてもいいはずなんです。

この分析には、放射光学会に入っていない女性研究者の数がぬけていますが、私の知るかぎりではこの人達を加えても13名が18名になる程度で事情はあまり変わらなくて、圧倒的に少ないですね。

さてこの13人のうちわけは、学卒で就職した人が44%、MCまで行って就職した人が23%、ドクター、DC卒で就職した人が23%、だからMC以上は半々の割合です。1人は在学中とかいてありましたからこれはたぶんMCだろうと思うんですけど学卒かもしれません。在学中という人が1人いて7%ということです。

もっと面白いことはこの学生さん1名を除けば全部就職しています。逆に言えば、放射光に入っている人は、つまり生き残った人です。(笑) もちろん就職していなくて放射光学会に入っていない人はこの統計データには表われて来ません。これもまた注目すべきことです。学会に入っていないわけではないけれども、放射光をやろうとしたら……。

もう一つは毎年行なわれているP Fシンポジウムに発表している女性の数を調べたんですけれども、放射光学会で活躍している人はみんな就職しているんです。だから生き残った人はいかに頑張っているかということです。

この数字をみじかな名大物理の現状と比較してみましょう。名大の物理は創設以来物理学憲章が作られ、講座制でない新しい研究室制度をはやくからとり入れて運営されています。現在68名のスタッフですが、女性は1名で、2%以下ですね。過去10-20年でみても最高3名でしたから3%-6%ですね。一方院生、学生の数というところとちゃんとした統計は取っていないんですけど、入ってくる学生がだいたい100人でその5%なんです。その5%が10年たっても20年たっても変わっていないんです。もし差別がなかったら、ちゃんとした教育がされていたら物理がきらいだという女性も出てこないだろうし、もっと女子学生や研究者がふえてもよいと思うんです。

大井 名古屋大では女の人は5%で、放射光学会の数字を見ると3.6%ですね。簡単には比較できないかもしれないけれども、数値としてはだいたい合っているんじゃないですか。だから学生がもっと増えない限りは……。一応、卒業した人はけっこうみんな頑張っているんじゃないですか。

谷口 そういうことです。だからわざわざ女性問題として扱わなくてもいいんじゃないかという意識があると思うんです。

松尾 放射光で実験をやるというのは個人の実験ではなくて、規模がある程度大きいから、ある程度条件の恵まれた人でないとやれないというところがあります。だから実際に女性で研究している人はもっとパーセンテージは多いけれども、大きなところに所属して、かつ放射光を取り扱う実験をやれる人はもっと少ないですね。だから3%というのはメンバーとしては多いような気がします。

谷口 それにみんな職について活躍していますから、すごいパーセントです。生き残った人はすごく活躍しているということですね。ただ、総体的に増やさなければいけないという問題はありますね。MCとかDCの人たちが少ないんでしょう

ね。かつ放射光学会にはずっとこの種の研究をやるうと思わなければ入りませんから、そういう人たちは数字に出てこない可能性がありますね。

松尾 物理学会や化学会、生物学会の女の人は何%ぐらいかを調べてそれと比較して、それより少ないんじゃないかという気がします。

谷口 イタリアのフラスカッティで行なわれた放射光学会に行った時に聞いたんですけど、INFN-LNFには10人から5~6人の単位でやっているみたいですけど、そのなかで女の人は、たとえば私のよく知っている研究室で10人のスタッフのうち1人は女性のスタッフです。学生は平均すると5~6人のうちの2人が女性です。日本より、率は多いですね。

宇佐美 放射光に関係した仕事をしている学生ですか。

谷口 そうです。プロポーザルも独立して出すと言っていました。日本の放射光のプロポーザルにヘッドとして出している人数は、2、3年分しか調べていないんですけど、たぶん10名以下ではないかと思います。協力者はたぶん20名ぐらいになるんじゃないかと思います。

P Fのシンポジウムの話が毎年ありますね。あれを見ているとヘッドとして発表している人が2~3名で、協力者のうちの1人というのも5~6人ですね。

高倉 そんなに少ないんですか。

谷口 少ないですよ。

高倉 P Fシンポジウムで発表した人の数ですよ。

谷口 1人の人がいろいろな研究の協力者になっている場合もあります。だから活躍しているとも言えます。

松尾 まだまだ統計的に扱えるほどの人数じゃないような気がしますね。

谷口 もう一つは、先のイタリアの会議は放射光X線研究会議ですが集まったのが300人ぐらいですが、そのなかで女性は25~30人で8%ぐらいです

から、さっきの日本の3%は低いということになります。それが証拠に、私は外国にいくと何回も聞かれるんです。“日本ではなんでこんなに女性の発表者が少ないのか?”と、よっぽど虐げられているんでしょうって言うんです。(笑)

大井 いろいろな外国の人が来ると、日本であなたが最初に会った女性の研究者だって必ずのように言われていたんです。ほんとにいないらしくて。外国から来た人がたまたま訪問した研究室に女の人がぜんぜんなくて、私がいると、ほっとしたような顔をされちゃって。フランスに行っていた人の話を聞いたら、研究所の数十%が女の人で女の方が多いかもしれないということでした。

高倉 中国も多いですね。

大井 国によって違いますね。

松尾 フィリピン系のアジアの人に聞いたら半分は女性ですね。

大井 日本は異常に少ないですね。工業技術院にいるとき調べたんです。というのは、あそこは女の人がけっこう集まるでしょう。工業技術院のなかの研究者全体で2,000人ぐらいで、女の方は70人ぐらいですから3.5%なんですけれども、3.5%という数があちこちに出てくるんです。(笑)年齢構成を見たら年配の人が多いです。一時期、若い人が入らなかったんです。だから今で言うと40代、50代が圧倒的に多くて、30代がないんです。ぜんぜん採用しなかったのが10年間続いたんです。私が入ってしばらくの間は年に全体で2人とか3人とか採っていたんです。毎年50人ぐらい採るんですが、そのなかで2名とか3名ぐらいです。ということは数%です。それが10年間は0%だったんです。それで問題じゃないかというのでみんなで集まって会をして、若い人たちに呼び掛けようというので見学会をしたんです。私が代表になっていたので取材がいっぱい来て大変だったんです。

それで見学者が20人くらい来ればいいなと思っ

ていたら100人以上来ちゃったんです。それからその後ずっと今でも1年おきぐらいに見学会を続けているんです。そして、一昨年ぐらいから10人近く採っているようです。50人中10人といったら相当なものでしょう。10人は行っていないかもしれないけれども、10人に近いぐらいの数を採りだしているからこれからどんどん上がっていくと思うんです。

高倉 応募してくる女性が少ない時代が10年あったわけですか。

大井 それは分らない。確かに応募してくる中に女性が少なかったのかもしれない。でも3%ぐらいは女子学生がいたはずだから応募してもよかったのかもしれないけれども、一つには非常に試験が厳しくてというか、応募者がすごく多くて優秀な男性がいっぱいいるところに女性が1人混ざってもなかなか採ってくれないですよ。飛び抜けて優秀な女性が混ざっていたら採るかもしれない。最近では社会的な風潮があるから少しは採らなければという意識が働いて採ってくれているんじゃないかと思うんです。

松尾 人数だけによらないという気がするんです。うちなんかは学生は全部女性でしょう。会社の研究所が最近、女性を採るようになって就職はものすごく良いんだけど、どういう採り方がされているかということ。景気が良くなったり悪くなったりした時に女性なら適当に辞めてくれるから、こっちで首を切らなくてもいい、補充したければすればいいという採り方をされているか、ずっと研究者で育てようと思って採っているかというのがあります。最近では辞めてもらったら困りますという感じで採ってくれるようになりましたが、ある時期はかっこよく研究職というので採っているけれども、実際は適当に辞めていってければ次に採れるというような時もありました。

高倉 だから生き残っていこうと思う人は10倍頑張らないといけないということですね。

谷口 意識はね。そうすると女だからという言葉

は返ってきません。

大井 例外というのはよく言われたことがあります。(笑)何か良い仕事をする、あれは女じゃない、例外だって、女じゃなくされてしまうんです。(笑)でも、悪いことをすると、やっぱり女だって。

松尾 面と向かって言うときは、あなたは別ですけどって付け加えるのね。その気になったらひどい目にあうのね。ほんとうはもろに言いたいところがあって言っているから。

高倉 そのパーセンテージをお聞きしていると、現在はずっと良い状況にあるかといったら、そうとは言えない感じがしますね。

大井 放射光学会はできて新しいし、それに参加しようという人は若い人よりも年輩の人が多んじゃないですか。そうすると、昔のままの状態があらわに出ているんじゃないですか。

高倉 まだ現在の状況が反映されていないけれども、実はかなり変わっているかもしれないということですね。

大井 時間的な遅れがあると思います。

松尾 実験棟で見ていると、最近はけっこう多くなりましたね。

宇佐美 最初、来たばかりのときはほんとにいませんでした。

松尾 5年前だとそうですね。

宇佐美 私はもともと生物だからそんなに女性が少ないという状況ではなかったんですけど、PFに行った途端、女性はほんとにいないくて、実験ホールに入っていただけでみんなの視線がわかるぐらいでした。

牧田 男の人が言っていましたよ、双眼鏡で見たって。(笑)

松尾 宇佐美さんは有名だったものね。私が行ったときはすでに有名でしたから。(笑)

大井 アイドルになっていたのね。

松尾 こういう人がいますよって最初に教えてもらったから。

宇佐美 それでストレスがたまったというほどでもないけれども緊張しましたね。そういう世界は初めてだったので。

大井 私も就職したときには男の人ばかりでした。就職したときはだれでも初めしばらくは緊張していますね。だから4月から夏まで少しやせちゃいました。男の人ばかりで女の人と口をきく機会がないので、きょうは初めて女の人と口をきいたなんて思ったりしましたね。そのうちこっちもそれに慣れてしまって、今度は女の人ばかりの集まりに行くと、何かギョッとするんです。(笑)逆のストレスというか、どういうふうに付き合っていたらいいのかなんて。PTAなんかに行くとそうなんです。(笑)そういうこと、ありません? どういう挨拶をしていいんだろうかって。男の人とはいつも雑な挨拶をしていたんだけど、主婦はお行儀よく何回もべこべこ頭を下げてお世辞を言ったりしなければいけないんじゃないか、ぶっきら棒な口をきいちゃいけないっていう感じがしちゃって。(笑)そうですね。

高倉 すごくよく分ります。だから男性と付き合うほうが気楽です。

宇佐美 けっこうこの会に来るのに緊張しましたよ。(笑)

大井 怖いだらうと思って来たのね。

高倉 安心した?



宇佐美德子氏

宇佐美 やっぱ怖かったです。(笑)だって10倍仕事をしようなんて……。 (笑)

大井 大学のほうが気楽じゃない? 私は大学に移ってからものすごく気楽で、男女の差を感じたことは1回もない。男だから女だからというのは一切ないんですね。

松尾 就職なんかで会社の人々が訪問に来られて対応する時なんか、自分のまわりの男性と違ってすごく緊張します。ものの言い方がぞんざいになっているから。

谷口 会社のほうでも今は女の人を積極的に採ろうと考えています。この前ある有名な会社の人事部長さんが研究室に来て話していましたが、会社の研究所の1つのプロジェクトのヘッドに女性研究者を採用してみたところ、ぼーと入ってくる男性よりよくやってくれるから次もとりたいと言ってました。私もすかさず就職先の門戸が閉ざされていた時代の女性で、いまも研究者としてもちこたえている人は全国にいますからそういう女性を発掘すれば、ものすごくやりますよと話しておきましたが、実績があるということはいですね。

今は会社の方が人手不足だから。男で物理出というだけで喜んで採ってくれますね。少し力のためこんでいる女性研究者がいれば採用したくなると思いますよ。

松尾 原沢さんはあそこにずっと常駐されていて、あそこの雰囲気はどうですか。

原沢 今でもあまり好きじゃないです。(笑)まだ慣れません。どうしていいかわからないという時期もありましたし、やはり宇佐美さんが経験されたように、私もストレスがたまるというか緊張します。私の場合、物性研のビームラインまではほとんど1周歩かなければならなくて、それを1日何回も往復しているので、そこを歩くのがすごく億劫です。これは性格的なことなのでしょうけれども。

松尾 学生時代は女性はいたんですか。

原沢 女性が多かったんです。人と話せないというのは自分の性格でしょうがないなと思って、慣れるように努めているのですけれど、やっぱり違った社会に飛び込んだんだということをすごく感じました。

宇佐美 原沢さんは筑波大の物理ですよね。女子学生はけっこう多いんですか。

原沢 パーセントとしては1割強です。

宇佐美 やっぱ生物に比べるとずいぶん少ないですね。

原沢 1割強ですけど就職して物理をやろうという人は減ってきます。

大井 3%になってしまいそうですか。

原沢 もっと少ないかもしれません。

大井 筑波大の物理を出たらみんな進学か就職になるわけでしょう。

原沢 進学が少ないです。

大井 4年卒で就職しちゃうわけですね。それは親からのプレッシャーがあるかもしれないですね。物理なんかずっと勉強しているとお嫁に行けなくなるから、いい加減のところ就職しちゃえとかあるかしら。

谷口 本人の意識ですね。

大井 もうあんまり勉強したくないとか。

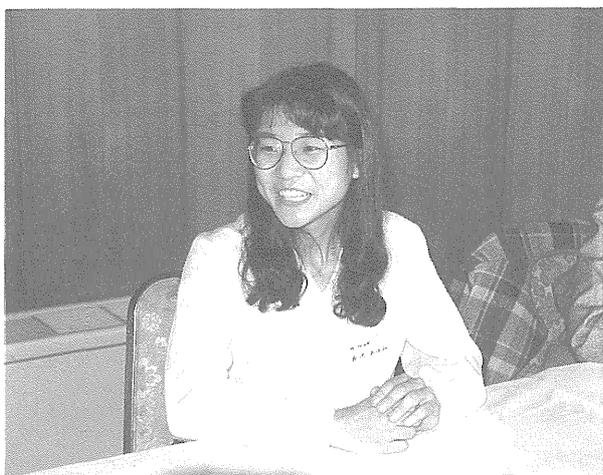
谷口 さっきの名大の統計ですけど、10年以上、5%がぜんぜん増えていないですね。少ないうえにその人たちが何らかの研究職につけるかということ、今の名大の物理のスタッフは60名以上いますが、いないんです。私の後はいないんです。

大井 1人しかいないんですか。

谷口 はい。以前は3名いました。こんなに恵まれた時代にいかに伸びていないかということですね。あんまりいい環境だとハングリー精神がなくなったのかしら。だいたい男の人がそうです。MCとかDCに行かなくなりました。

大井 中国人とか留学生の勉強熱心な人が大学院にワッと来ていますね。

松尾 物理学会のドクターの最終年度が出ます



原沢あゆみ氏

ね。あれを見ると東北大学とか筑波大とか4割ぐらいが留学生ですね。

原沢 今の学生には興味がわからないんじゃないかしら。

大井 じゃ何で物理に入っちゃったわけ?(笑)

松尾 入れたっていうのがありますね。

大井 どこでもいいから受かりやすいところをねらって受けたっていう受験のあれかしら。

高倉 それはないわね。

大井 やっぱり物理がやりたくて入ったんですわ。

原沢 やっぱり物理は特殊ですよ。

大井 だからそういう加減に英文科にしようか国文科にしようかというのとは違いますよね。

松尾 ありますよ。第1志望、第2志望を調べるでしょう。そうすると第1志望は物理、第2志望は国文、第3志望はまた何か別とか、けっこうあるんですよ。

大井 業者のテストで点のいいのから第1志望、第2志望にしていくんでしょうね。

松尾 試験日を合わせて、ここなら入れるって。びっくりするようなのがありますよね。

原沢 途中で挫折してしまうこともありますよね。興味が続かないのかもしれない。(笑)

松尾 形になるのに時間がかかるということはありませんね。高校で物理の授業を取る女の子が圧倒

的に少ないですね。私たちのころは、たとえば理科系の方はみんな取ったでしょう。最近では物理の先生の数が少ないというのは、物理の授業の数が少ないんです。だから物理の先生の就職口がないんです。

大井 高校の教師の口がないんですね。

松尾 それはクラスがぜんぜん少ないんです。物理を必修にすると受験生は大変ですから。女の子は化学とか生物が多いですね。

宇佐美 それと受験のときに物理だと点取りにくいとかそういうことがあるかもしれませんね。だから純粋に物理が面白いとか詰まらないではなくて、点取りやすいところに行くわけです。

松尾 だから研究者を育てるということではもう一つ下の段階でなんとかしないと、どんどん減るんじゃないかという気がします。聞いていると今は進学校でも女子で物理の授業を取るといのは、大学へ行きたいというなかで1割ぐらいですから、すごく少ないですね。物理学会誌にも出ていますけれど、男の子も含めて物理の高校教育をもう少しなんとかしないといけないというのがありますね。物理離れをどうするかというので。放射光学会だったら化学も生物もいろいろな分野があるんですけど、理科系そのものが少ないんですね。

大井 最近の女性の進学傾向として経済学部とか法学部の進出が目立ってきたというのが出ていましたから、理学部とか工学部もどんどん増えていくのかなと思っているんですけど。

松尾 たしかに文系は増えたみたいですけど。

大井 理と工はそんなに増えていないんですね。私は昔は仕事をしながら女だからみんなに見られているから辞められないし、ちゃんと仕事をしていかなければいけない。そのうちに後輩が次々に入ってくれば私は力が抜けると思っていたんだけど、入ってこないのね。だからいつも自分が見本みたいな気持ちでずっと来なければならなかったですね。私が入ったところに私が入れる

んだから、もう少したてばどんどん女の人が増えて、今年はテストケース、今年は2人採った式に、女の人が毎年、入るようになるだろうと期待していたんですけど、ならなかったんです。少し入りましたけれども、結局、その後、入った人が辞めちゃったんです。

松尾 原研はどうですか。

牧田 原研は少ないです。原研の設立の頃はちゃんと女性の研究者がいらしたのに、その後ずっと女性を採っていなかったんです。ここ最近やっと採り出したんです。だから少ないですよ。現在原研全体では3,000人程度働いていますがその中で女性研究者は10人くらいです。3%なんてそんなものじゃないです。

原沢 最近、高エネ研の中でも女性の教官と技官が集まっています。高エネ研全体で人が何人いるかわからないのですが、そのうちの女性は10人くらいです。

大井 1割くらいですかね。

原沢 もう少し少ないと思います。

谷口 放射光は100人もいないんじゃない？

原沢 放射光だけで100人いるから全体だと500~600人くらいだと思います。

高倉 やっぱ3%？ (笑)

牧田 3%の壁を破りたいですね。

松尾 次は5%を目標に。

牧田 1割になったらこういう改革が必要になるかもわかりませんね。

大井 今、うちの大学だと全学部で女子学生が51%で、男性のほうがちょっと少ないんです。物理にも20%ぐらいは女子学生がいるんじゃないでしょうか。うちの研究室は学生の3分の2が男で、3分の1が女で、研究生とか助手は女で、全部合わせると半分は女なんです。たまに年によっては男が少ないと男性がすごく貴重なんです。(笑) みんなが大事にしているでしょうと言うとそうじゃなくて、みんなのためにこき使われていると言うんです。(笑) 力を出すときとか、夜遅くまで

仕事を手伝って、車で送り届けるところまで全部しなくちゃならないし、気を使って大変ですって言っていましたけれども。(笑)

松尾 共学ってそうなんでしょうね。

大井 けっこう人数がバランスのいいところに来ちゃっているから。

谷口 教養部系の研究体系というのは？

高倉 ほとんど変わりません。ICUは教養学部しかない小さな大学で、学生数は全部で2,000人ぐらいしかいないんです。教養学部のなかに理学科があります。

大井 理学科というのに物理もあるという形ですね。

高倉 教養学部は東京大学とあとは広島大学にあるそうですね。やっていることの中身はぜんぜん変わらないですね。優秀な女性が多いんです。男性も優秀ですが、全学的には女子学生の方が少し多いと思います。

大井 平等に採点すると女子がどんどん増えちゃうわけですね。

高倉 平等にやると女性のほうがいい点を取るんです。

大井 べつに男子何人、女子何人と決めているわけじゃないんでしょう。

高倉 決めているわけじゃないんですけども、できるだけ男性に来てほしいというところがあると思います。なぜなら男性は将来、社会に出て仕事をしてやっていきますでしょう。女性は続かないというところがありますよね。

牧田 そうやって入ってきた優秀な女の人たちが、結局、さっきの3%になってしまうんですか。

高倉 今、語学科、社会学科、人文科学科などを含めて言っていますので、物理の状況とはまたぜんぜん違うと思います。理学部の場合はやはり男性の数が多いですね。物理の場合は女子学生は1割ちょっとですね。

谷口 研究の独創性というか独自性についてはほど

うですか。能力があるかないかというのではなくて、そういうものをどのくらい自分たちの研究の中でみがいているか。

高倉 ちょっと思うのは、女性は一生懸命頑張る人もいますけれども、逃げ道がありますよね。結婚してしまえばすむとか、社会的にも女性が頑張ることに対して、そんなに頑張らなくてもいいんだよということがあったりします。逆に仕事をするということは、その女性にとってしたいからするんです。社会的な要求に従ってするんじゃなくて、自分がしたいから、好きだからするんです。だから、したいことができるという意味で、独創性ということで評価されるかどうか分かりませんが、わりあい自由に研究が推し進められるという点で、独創的なことも比較的やりやすいと思います。

大井 ちょっと男性の味方をして言うと、物理を選ぶというのはどうしてかという、ほかの学科を選ぶのに比べると、やりたいから選んでくるでしょう。そして将来、研究をしていこうという男性はやっぱり好きということがあるんじゃないかしら。そうじゃなかったら少し方向を変えて、技術系の会社の技術職になるとかいろいろなやり方があるわけです。だから仕事として研究ができる仕事を選ぶというのは、食べていくためというよりはしたいからじゃないでしょうか。そうじゃなかったらもう少しかっこいい仕事で、給料の多そうなところに行くんじゃないでしょうか。(笑) もう少し別の意味でのやりがいのある仕事ですね。好きじゃなかったらそういうところに行くんじゃないでしょうか。

松尾 やっぱりバリアなんかを考えたら、さっき先生がおっしゃったように、ほんとうにやりたい人しか残らないですね。

大井 それは女性のほうがすごいバリアがあるでしょう。

原沢 男の人を見ていると、あまり深くは考えないで決めている方が多いのではないかと思います。

す。

大井 女の人の方が就職のときに真剣に悩むでしょうね。将来、自分がどういうふうにしていくか考えて就職するでしょう。男の人の方がもっと楽にポツと決めちゃうんでしょうね。

松尾 条件は女性のほうがいっぱい付きますよね。勤め先がどこでとか、たとえば結婚したら続けられるかどうかとか。最初は続けようと思っていてもいろいろ事情が出てくるから。

宇佐美 逆に男の人は妻子を養っていかなければいけないという気持ちがありますよね。だから就職に対しても研究をしている人というのはあまり給料がよくないから、企業のほうが給料がいいとか、そういう制約というか、男の人のほうがそれを気にしているような気がします。ほんとうはやりたいことがあるんだけど給料のことを考えると不安だとかあると思います。

べつに女の人が家族を養っていてもいいんだけど、そういう意識はないですよ。自分が生きていければいいやと思っているぐらいで。

牧田 今までの延長で、1人でやっていければいい、そんなに給料が高なくても面白いことができるだろうって。

松尾 いざとなったら辞めて結婚すればいいなんて若いころは逃げ道の一つとして考えたこともありますね。

原沢 この間、筑波の地方の新聞を読んでいたら、留学生のインタビューがあって、ケニアの方の取材だったんですけど、最後のところに、日本の男性はかわいそうだ、奥さんに給料を持って帰らなければいけないと言っているんです。(笑) 向こうの社会は女性も働いているのかと思いました。

大井 どうしているんでしょうね。たとえばアメリカの男性なんかは奥さんに給料袋を渡すのではなくて、必要な生活費だけを渡すと聞いています。家計を管理するのは日本だと奥さんが当たり前にするけれども、アメリカではご主人のほう

が家計を管理する。奥さんに渡すと浪費しちゃうからかもしれないけれども、奥さんには必要な分は渡さない。日本の主婦に言わせると、それはお金があるからそういうことができるのであって、日本みたいにとにかくこれだけのお金でやっていくとなると、奥さんが預かって一生懸命融通しないとやっていけないという話を聞きました。アメリカの奥さんたちは日本の奥さんはお金が自由になってうらやましいと言っているそうです。

牧田 日本の男の人はまだ自分が家族を養うのが当然と思ってがんばっているのでしょうか。

大井 自分の分だけでよくて、もし子どもが生まれたら半々に分けるとか。

松尾 それだと家の用事も半々でないとなかなか大変でしょうね。

大井 ほんとうはそうなったほうがうまくいくんでしょうけどね。家の仕事も育児も何もかもみんな半々にというふうにしておけば、女の人もすごく働きやすいし、男の人でもたとえばPFに働いている人は子どもの面倒を見なければいけないから、ここに保育所があれば男の人でも預けられるというのでよくなるかもしれませんね。

谷口 そうなるきざしはあるんじゃないですか。今はわりと一般の社会でもそういう空気があるでしょう。

原沢 でも両極端だと思います。そういう人と保守的な人がいますよね。

大井 女の中のなかにも自分は家に引っ込んで、夫のために尽くしたいという人がたくさんいるのね。男の人でも自分が全責任を負って養いたいという人もいますよね。

原沢 きちんとそういう組み合わせができればいいですね……。 (笑)

大井 よく確かめてからじゃないと結婚しないほうがいいかもしれない。どういう感じの人かをよく見定めて、少なくともPFで仕事をしようという人は相手をよく見定めて。 (笑)

谷口 女の中の意識が変わらないとなかなか変わ

らないですね。

大井 女の中の意識が変わらないとだめですか？

谷口 獲得したものは、それはよくないなと思っても心地いいから、わざわざ変えようとは思わない。もし変えたいという要望があればやぶさかではないという人も含めて。だからそれは変えたいと思う人が音頭をとらないと進んでいかないですね。

松尾 私自身は母子家庭で育てて母が働かざるをえなくて働いていて、いつ家に帰っても誰もいないという経験をしていますから、もし自分が結婚して子どもを育てるんだったら、やっぱり家にいたいという夢があって、それが一つのバリアになっちゃうんですね。

大井 うちの娘なんかを見ていると、小さいときは、大きくなったら親と一緒に仕事に行きたいから、それまで辞めないで待っていてくれって言ったのに、思春期になると、子どもを置いていくのはかわいそうだと言いつつわけです。だけどその後の様子を見ていると、自分が勤めに出ない姿が想像できない。働くのが当たり前になっていますね。いま大学院へ行っているんですが、自分がやりたいことを見つけて、そのテーマでずっと仕事をしていくのは当たり前というふうには、ごく自然についちゃったみたいですね。

高倉 今は子どもをあまり産まなくなりましたね。

大井 家に入って育児に専念する人は夫の給料だけですね。そうするとお金をかけた育児をしたいから1人でいいとか、2人産むとそんなにお金をかけられないとか、そういうのがあるんじゃないかしら。自分で給料をもらう人は育てる暇がない。 (笑)

宇佐美 このままで行くと何年後かにはものすごく減るんでしょう。

松尾 大学もこれから減るんでしょう。

大井 今がいちばん最高なんでしょう。

松尾 私立の学校は…？…。

高倉 ええ、頑張っているみたいですね。

大井 子どもの人数がどんどん減るでしょう。いわゆる物理とか生物とか放射光にたくさん優秀な女性が入ってほしいというなら、よっぽど小さいときからしっかり意識をそういうふうになるように育てていかないと、子どもの数はどんどん減るし、物理離れはしてくるし、なかなか集まらないかもしれないですね。だから魅力的な環境づくりをしていかないといけないですね。

松尾 理系離れというのは中学校後半の授業のやり方にもあるし、高校の先生の進路指導のやり方にもありますね。いちばんよくないのは最初から分類しちゃうんですね。成績がこうだから、何がやりたいというのをなかなか認めないというか、あなたはこの成績が悪いからこれは受けられませんという感じなんです。ほんとうは成績と好きなこととは違うんだけれども、それを聞くだけのゆとりがないんですね。

高倉 高校生には学問としての面白さを伝える教育でなければいけないですよ。にもかかわらず、どこの大学に行くには物理はやめたほうがいいとか取っておきなさいと言う。こういうレベルでの物理であってはいけませんよ。

松尾 親も安全なところを願っていますからね。

高倉 ほんとうに物理が面白いという教育でなくて、こういうのがあるからこの式を使いなさいって、何かルールがあるみたいで……。

松尾 そのへんに問題点がありそうですね。底辺という意味だとそのへんが相当大きいと思うんです。そのわりに新聞なんかではサイエンスの部分は難しいことが書いてあって、読んでもなかなかわからないことがありますね。

谷口 昔はほっておかれないと学生も思っていたし、先生も生徒をいい意味で自由放任をしたほうが本人の自主性が育つと思っていました。それがそういうことでは伸びないということが分って、名大の先生もある時期からもっと面倒をみるようになったんです。

大井 手取り足取り教えたほうが最近の学生に対しては効果があるというわけですか。

谷口 そうですね。独自性を待ってほっておくとぜんぜん実らない。だけど少しこちらの頭を切り換えて面倒をみると、みただけのことはあるんです。勉強の仕方が高校時代から与えられた課題でこなすことに慣れていきますから。以前は与えられたものには反感を持って授業をサボったりしましたけれども、今はそうじゃなくて、むしろ真面目に出ている。だから言われたことはやるというふうにかなり素直なんです。

大井 それは言えますね。

高倉 素直すぎてちょっと物足りないですね。

谷口 そう言わずに学生と楽しく付き合うつもりで、ちょっと面倒みすぎだなと思っても、そうすると自分で歩けるようになるんです。少し歩けるようになったなという時に、今度はあまり面倒をみないで自由に、自分が考えてやっているんだという実感が持てるようになるといいですね。それまでかなり面倒をみないといけない。

松尾 それはありますね。だから、どこで手を放すかですね。たとえばずっと研究体系が出来上がっているところだと長い目で見れるからそれができるんだけど、たとえばマスターまでとか線が引いてあると。

高倉 世話をして世話をしてそれで終わっちゃって、その先がない。

松尾 研究職に入っていけるという保証というとおかしいですけど、何かそういうのが続いていると、本人もやる気がおきるのでしょうけれどもどうせマスターまでだからという意識があるから、なかなか育たないですね。

谷口 マスターで就職するのもドクターへ行くのも今は同程度の選択のようです。昔、私たちが考えていたほど意識の上でバリアがないんです。ほんとうはドクターへ行ってからずいぶん変わるはずなだけで、メニューがいっぱい並んでいてどっちにしようかということなんです。こっちは面

白いんだよと言わないとだめなんだと思います。
松尾 最初からドクターに行かずとやりたい
と思っている男性は、やっぱり違うなと思うとき
があるんです。これで行くと何か1本持っている
というのか、そういうのが男性の場合は立てやす
い。女性の場合どこでどう変わるか分からないとい
う不安みたくないものをいつも引っさげているか
ら。

物性研は年限があるんですか。

原沢 技官はありません。

松尾 助手はあるんですか。

原沢 5年です。

松尾 研究というのはけっこう長期戦ですから
ね。そこがなかなか難しいですね。

牧田さんみたいに頑張っていけるといいけど。

牧田 私がこのなかでいちばん苦勞していると思
いますよ、就職に関しては。(笑)

大井 就職のときだけね。

松尾 あちこち行っているものね。

牧田 原研の特別研究生、医大の教務職員、そし
て今は期限つきの原研の専門研究員をやっている
のですものね。

高倉 女性とか男性に限らず何か学問をやって、
その学問を生かして将来の研究職につながって
いくという夢が、今の状況では狭いんですよね。男
性だってそういう状況があると思います。それを
そのまま生かしていくことができないですよ、
なかなか。こういう状況が打破されないと高校ま
で下がって行って、将来の研究の展望が開けてこ
なければ、結局、そのへんで適当に選んで、どこ
かもっと違った方向に逃げてしまうということが
あるんじゃないでしょうか。やりたいことを夢と
して持つことと、それが実現することはまた別な
ことですから、それが実現していくような研究状
況がなければ、女性も男性も夢がしぼんでしま
いますね。

大井 それは男性も一緒ですね。

谷口 今は大学に残れる状況と、放射光みたいに

共同利用機関へ就職する場合を比べると、圧倒的
に共同施設の方にポストがついて来ていますか
ら、毎年人が増えています。

宇佐美 ポストがありますね。

谷口 大学は殆どないですね。

宇佐美 それこそ運が良ければという感じでは
ね。

大井 たまたま辞めた人の囲りに代わりとして合
っている人がいたとかね。

谷口 だから放射光の場はそういう意味でもチャ
ンスがあるわけです。

宇佐美 そうですね。だからこれから学生の人が
入ってきても確実にそういうポストはあるから、
女性、男性に限らず若い人がやってくれたら、そ
れなりに先は開けていますよね。

松尾 若い人が多いというのはまたいろいろな問
題が出てくるでしょうね。何年かたてば膨らんだ
時期にどっと入った人達の問題が。

物理学会誌を見ていると毎年求人があるんです
けど、あんなに人数が増えているのですか？ そ
れとも新陳代謝…？…。

谷口 放射光をやっている人は、一般的な意味で
言うと、新しいものを作ろうという意欲的な研究
集団ですね。ということは逆に、力があればそれ
を認める柔軟さが他の大学機関なんかよりもあ
ると思うんです。

松尾 新しい学問という意味ではスタートライン
が一緒ですから。

宇佐美 伝統がない分、女性が入っていきやすい
ですね。

谷口 だから女性が伸びるすごくいいチャンスだ
と思います。

松尾 古い学問だとあの人がいて、偉い人がいて
ということでもどうにもならない。

谷口 それこそ先ほどのノーベル賞じゃないけど
研究の最前線の現場では、先端のわからないと
ころをちょっとでもわかるためには、一度アメリ
カであったんですけど、ものすごく偉い人たちで

も、自分がそのことに関して知らなくて、こちらはちょっとだけ先に知っていた、たとえば写真の撮り方のようなちょっとしたことでも、ものすごく真剣に聞きます。なぜかという、その時点で先端に行きたいというのがものすごくあるわけです。だから率直に聞くんです。日本では偉い先生はそんな聞き方はしないと思うんですけど、あれはすごく感激しました。

未知のことを知ろうと思ったら額面どおりのことを言っているのではなくて、もっと純粋な気持ちで聞いていると思います。そういうところが日本では多少遅れています。でも放射光の研究集団は、フロンティア精神が旺盛だから、そういう意味では変な女性観はあまりないと思います。こちらがちゃんとしていれば認め得るものを持っていますね。

松尾 大学の場合はP Fの雰囲気とずいぶん違いますね。みんなスタートが一緒に、さあ、やりましょうという感じですね。やりたいことをずっと温存していて、そのテーマを持って、それと乗り込む雰囲気があるから、研究のグループとしては偉いとかそういうのはなくて、対等ですね。

原沢 私は興味があってこの分野に入ったわけではありませんでした。就職してたまたまここへ来てしまったのです。だから毎日、学ばせてもらって、うるさいほどいろいろ教えてもらっています。人数が少ないから仕事をしなければ困るということもあったのでしょうけれども、ほんとうにいろいろなことを教えてもらっています。ぜんぜん知らない分野だったけれども、それでも教えていただけることで自分の中にもいろいろなものが膨らんできたという感じが非常にしていて、とても感謝しています。まだまだそういうことができる分野でもあるし、けっこうそういう気持ちを持った方たちがお仕事をなさっているのです、ついていけると思っています。

大井 みんな教えたくて手ぐすねひいて待っているんじゃない？ (笑)

松尾 スタートラインがそんなに大きく違わないですね。分らないところはみんな分らないし、年がたってても学生でもこうやってみたらどうかという時に、同じような夢について話ができますね。

高倉 研究がどういうふうに展開していくのか、どういう新しい局面があるのか、みんなわくわくしながら、ドキドキしながら実験の先行きを見ていて、あなたの研究はどうなったの？ 自分はこうなんだけどとお互いに突き合わせてやれますね。それは若い人も経験を積んできた人も結局同じですね。何が飛び出すかということがありますね。

松尾 挑戦するという意味では一緒のスタートだから、そういう意味では若い人が入ってきやすい分野ですね。

宇佐美 それからこの学会はいろいろな分野の人がいるので面白いですね。たとえば大学だと物理学科だったら物理、生物学科だったら生物だけです、私なんか大学にいたら絶対こういうところに来ていなかったし、自分がこういう世界に入っているのが不思議なくらいなので、ほかの分野の人と話ができるというのは面白いですね。大学院の時代にそういう経験ができたのは良かったと思っています。

高倉 それはラッキーかもしれませんね。

宇佐美 これから研究者になっていくにしても、たとえば自分の分野だけで付き合っていたら、もう先が見えちゃっているというか、詰まらないと思うんです。

松尾 P Fの実験棟のパネルをずっと見て回るだけでも楽しいですね。

大井 もっとたくさん行けたらいいなと思うんですけど、時間が取れなくてたまにしか行けないんです。忙しいのは覚悟して行くんですけど、電話が鳴らないし雑用が来ないと思うと、なんかすごくほっとするのね。(笑) うれしいなと思って。これから何日か自由があるって。(笑)

宇佐美 皆さん、それを言いますね。

大井 よっぽどじゃない限り電話は来ないでしょう。あそこにいると自分は研究をしているという気になれるの。今、私は研究者だって。(笑) ふだん、いろいろ書類を書いたり学生と会ったりとかしていると、研究をしているというよりも先生をしているという感じが強いんです。それで何日か過ぎちゃうと虚しい感じがしてきますね。たとえば3日間でこれだけ仕事ができるのに、大学にいたら3日間では仕事はかどらない。どういうわけだろうと思ってしまいます。忙しくて大変だなという気持ちと、研究者に戻れるというか、ほっとする気持ちと両方ありますね。

松尾 準備をしているときはそうですね。ああ、またしんどいんだなと思うけど、意気揚々と準備していたりして。(笑) 帰りなんかもぐったりして、もういやだと思って帰ってくるんだけど、また意気揚々と行くんですよね。性懲りもなく何年もね。

谷口 時間が限られているというのはいいかもしれませんね。瀬戸際で真剣に考えるといいアイデアが生まれてくることもありますから。

松尾 一つはそう簡単に自由にだれでもが使えない貴重な時間ですから、なんとかしようと思えますからね。向こうに行ってみないとわからないことがたくさんありますから、出掛けていってけっこうしまったと思うこともあるけど。

分子研は時間が長いんですね。

大井 分子研は夜お休みなんでしょう。きちんと休むんですね。そうすると夕方何時に終わるんですか。

谷口 6時です。

大井 6時まで必死でやらなければだめだと思ってみんなやるわけですか。

谷口 もちろんそうです。週に1日は9時までです。たまたま会議があってみんながいて、ユーザーがもうちょっと延ばしてほしいというときには、時間延長サービスがあります。だいたい延ば

してほしいと言いますけど。(笑)

大井 それで何時ぐらいになるんですか。

谷口 たとえば打ち上げの日みんないるから、延長希望が多いですね。少しでも良いデータを集めたいと思う人が多くなって、止めたくないって。(笑)

松尾 でもその日のうちに終わるといのは気分的にずいぶん違いますね。

谷口 人間的な面でいいですね。

松尾 実験をする上ではどうなんですか。

谷口 実験上も真空なんかは夜、引かなければいけないでしょう。だからそういう時間がないと困るし。もうちょっと延びてもいいとは思いますが。

大井 時間が決められていて4日間しか使えないで、夜は止めますと言われたら、やっぱり困るでしょうね。(笑)

谷口 ふつうは1週間ないし2週間です。

大井 1週間だったらやっぱり夜寝るわね。(笑)

谷口 私はかなり欲張って1か月ぐらいもらうんです。

大井 1か月もやれたらいいですね。PFは希望者がすごく増えたでしょう。だんだん混んでくれば1人いくらって時間が……。でもあまり短くされたら何もできないですね。今までみたいにしばってやらなければだめでしょうね。

宇佐美 審査が厳しくなってくるでしょうね。

松尾 審査を厳しくして時間を保証して欲しい、しかし自分が外れたら困ると両方あるからどっちとも言えないところがありますね。

大井 放射光学会が鰻登りに増えてきているということは、使いたいという人がどんどん増えてきているわけでしょう。

松尾 女性に関係なくユーザー用のいろいろなものがもう少し整備されるといいんですが。

谷口 それにしてもテーマごとで片付けちゃってしょう。

大井 もったいないのね、せっかくちゃんとセットしたのに。(笑)

谷口 イギリスのダースベリーでは、生物系のビームラインをかなり専用的に使っているんです。人数も向こうはわりと小回りのきくというか、こじんまりした感じで能率よくやっていますね。

松尾 フロアがもう少し大きくて、たとえばハッチが並列に置いて、テーマが変わるたびに全部配り出さずにすむとずいぶん楽になりますね。

宿舎は何名ぐらい泊まれるんですか。

大井 宿舎はたいていっばいになっていますね。

松尾 たしかに女性を見る機会も多くなりましたね。

原沢 どんどん増えるとうれしいですね。

松尾 何かのときに話ができるというのは、ほっとするところがありますね。そのわりに宇佐美さんとも今日初めて話すんですよ。(笑) しょっちゅうすれ違って、名前はちゃんと聞いているんだけど、話をする機会がなかったですね。

高倉 談話室で夜食を食べたりしている時でも、お互いに話をするという雰囲気がありませんね。もう少しみんなこれ(座談会用に各自が付けていた名札を指す)を付けて……。 (笑)

宇佐美 名札を付けましょうって書いてありますね。

松尾 なんとなく敬遠しちゃって自分のグループだけでしゃべって、ほかの人と話をしませんね。

大井 もっと気楽に声を掛け合ったほうがいいかもしれませんね。

松尾 疲れていてね。(笑)

大井 そういうのもありますね。口をきくのもいやだとか、ほっといてくれ、早く寝たいんだなんて。

松尾 宿舎までこうやって帰るときもありますものね。揺れているときもあります。

高倉 あそこまでけっこう遠いんですね、歩いてみると。冬なんか夜中に帰るときは寒いですよ。

松尾 ダウンのジャケットなんか持って行って、

本格的に武装して。

高倉 宿舎をもうちょっと近くに建てるというのは、やっぱり日本人的な発想なんじゃないかな。アメリカのブルックヘブン研究所の真似をして建てたというのを聞いたことがあるんですが、結局、アメリカは車社会でしょう。日本の場合、必ずしも車社会じゃないですよ。

大井 あそこだけが車社会に作ってあるわけね。だから、車を持たないで来ると大変なのね。

松尾 私は車で行けないんです。

大井 私たちは必ず車で行くことにしています。

1台は必ず出すというふうにしていけば、宿舎の送り迎えもできるし、食事土曜、日曜は食べに行けますからね。変な時間に行ってもどこか開いているでしょう。センター地区まで行けば。

高倉 PFは、土、日にマシンタイムがあるし夜中にもありますね。ところが夜中と土、日は食堂は当然開いていませんね。だから実験の計画と食事の計画をちゃんと立てていかないと実験がスムーズに行われないうちがあるんですよ。

松尾 宅急便で送るんです。下のほうにデータなんかがあって、上にコーヒーとかラーメン、缶詰とか……。

宇佐美 奈良から持ってくるんですか。

松尾 ええ。全部送っておくんです。何日間、何人行って、何日と何日は交替で食べに行ける。共同実験をしている人たちがどこかに食べにつれていって下さるときはそういうのは残るんです。だけど残るかどうかは別として、山と同じで一応何日分かを運ぶんです。

大井 お米からおかずの材料からみんな運んで、だれかが炊事当番になって作るんですか。

松尾 簡単に食べられるもので。宿舎の補食室で朝、作って、お昼の分も持っていくんです。一度、クラッカーだけで済ませたら、次から学生が、あれも入れましょう、これも入れましょうって。(笑)

大井 それはずいぶん労力を割かれますね。人手があればいいですけど、人手がないところだともったいないですね。

松尾 交替制がなかなかうまくいかないときがありますね。

大井 私は車で行くから、あそこでの楽しみは寝ることと食べることね。(笑) 今日はどこへ行こう、まだ開いているかもしれない。何とかホテルの何を食べましょうって。(笑) おいしいものが食べられるから楽しみなんです。せっかく行ったんだから。日曜日の朝はあそこのデニーズはすごく混むのよね。あそこまで食べに行くんです。

あのそばの宿舎にいらっしゃるわけ？

原沢 少し斜めかな。

大井 じゃ、710？

原沢 もうちょっと北です。

大井 あの通りの向こう側の宿舎ね。

原沢 独身寮です。

高倉 P F実験棟の1階のスタンドにインスタントラーメンとコーヒーがあるんですけど、土、日はあれが売り切れてしまうんですよね。

大井 あそこはビールも何もなくなっちゃうの。ビールを飲んで寝ようと思って買いにいったらもうないの。(笑)

松尾 土、日はまずないですね。

高倉 せめてああいうのがちゃんとしていればなんとか食べられるのに。

松尾 なんでもいいから口に入れれば安心して寝られるんだけど。

原沢 夜止まってくれたほうがきちんと食事もできるし、きちんと眠れるし、光は止まっていたほうが良くありませんか。

松尾 そのくせ実験で温度なんか変えてやっていると、ああ、もう1時間欲しいとか思うんでしょう。

高倉 だから夜中に走らせるというのはべつにかまわないんですけど、走らせるなら走らせるなりの環境が整うことを望みたいですね。

大井 真夜中にお風呂に入れるとか、仮眠室もちゃんとね。24時間体制を取ってほしいですね。

松尾 何人かそろえば交替で寝ることができますね。この前、中国の人たちは次の9時から次の9時まで入射にあわせて2交替できちっとやっていましたね。

高倉 それができればほんとにいいと思いますね。

宇佐美 いつも1人で来られるんですか。

松尾 最近は1人か2人連れていって、あとは共同実験をしている筑波大の学生さんが来て下さいます。ところが私だけが行くというと助っ人が少ないんです。今度は2人連れていきますと言うと、そうすると男性が3人ぐらい。(笑) 今度は先生だけですか。(笑) 最近は私が行かずに学生だけのほうがいいような気がします。(笑)

大井 しかし、慣れたらやめちゃうということになりますよね。

宇佐美 マスターだと2年間でやっと慣れてきたところで終わっちゃうから。

松尾 1回目に行った時にどういうものか分かって、2回目はある部分だけを責任を持ってできるようになって、全体が分ったら修士が終わりという感じですね。

宇佐美 特に放射光なんかは決まった時間しか使えないから、マスターの学生なんかは辛いかもしれませんね。

谷口 今は4年生は許されているんですか。

松尾 4年生はメンバーにはなれないでしょうね。

大井 4年生を連れていくときは実習願いを出して行くわけです。マスターになるとちゃんとやってもらえるんです。だから学生全員にその訓練を受けて資格はなるべく取れと言う。あとでだれがマスターに決まったなんてきて。(笑) そういう人に目を付けて、その学生を特別にする。1人の人にしぼらないと時間がむだだから。不公平だけど1人の人をなるべく何回か連れていくように

しているんです。

松尾 一つにはうちのように地方大学で小さいと、ああいうところで見えてくるというか、お年寄りの先生でも真夜中に一生懸命実験をやっている姿を見るだけでも感激して、帰ってから実験のとりくみ方が変わるというのはあるんです。勉強ではなくて、本当にやりたいことをやっているというのはどういう事なのかを見るという意味でも、できるだけ幅広く連れていくように考えているんです。

大井 研究室には何人ぐらい女性がいますか。

松尾 学生は35人で6講座あって、実験はあまりたくさん来ると大変なので、うちの講座は5人ですが、今年はマスターが7人います。マスター7人で学部5人、スタッフは3人です。装置が少なかった頃は昼夜2交代でした。PFにも強くなるし。(笑)

牧田 4年生は夜。

松尾 でも最近は装置が増えたので大丈夫です。

宇佐美 もちろん全員女性ですよ。

松尾 すごい社会でしょう。

宇佐美 ちょっと想像がつかないですね。(笑)

松尾 だから、「女性のためのなんとか」と言われるとぞっとします。どっぷりそういうところに生きていますから。PFに行くとほっとします。

原沢 やっぱり半々いなくちゃだめなんですね。

宇佐美 4分6ぐらいがちょうどいいんじゃない？

大井 理想を言えば男の人がちょっと多いほうがいいかな。

谷口 まだけっこう延びる余地があるのね。

大井 40%になればね。でも今の状態は社会で女の人を受け入れるために場所を空けたけれども、女性の研究者が育っていかないという感じが強いんですね。

原沢 一般的に見て女性のほうが社会のこととかいろいろなことを考えている人が多いですね。研

究者というのはそういうことを考える余地がなくて、ただただ研究をしているんじゃないかというイメージを持っていました。

大井 研究者というのは研究だけしてて、ほかのことは何も追求しない。そんな人生はいやだということですね。特に女の人のそういうのは真っ平だということね。

松尾 そういうふうになると、たしかに変人扱いされますね。(笑)

大井 社会のふつうの人たちはみんなたぶんそういうふうにも最初から偏見の目で見ているようで、子どもなんかはそれで影響を受けるんですね。自分たちの親は変な人だって。(笑) 親がそういう仕事をしているのになんであなたは頭が悪いのって言われて、ストレスを感じたようです。だから、そんなことはないわよ。たまたまそういうところに就職しただけなんだからって言うんです。ふつうの会社員になっていたら何も分らなかったのに、親の仕事を見て子どもはできるはずだと思われちゃって、かわいそうですね。それにちゃんと面倒をみてやっていないでしょう。

だから私の物理の友だちの子どもはあまりいい大学へ行っていないんじゃないかと思うの。教育に熱心じゃなかったのかもしれない。子どもを教育する時間があったら自分が勉強したいという気があったし、よく親の背中を見て子どもは育つと言うでしょう。だから親が一生懸命勉強すれば子どもはそれを見て、ああいうふうに勉強するものだと思って自然に勉強をしてくれるだろうと思って、子ども部屋で論文を書いていると、子どもはママは勉強しているなんて安心して寝てたりして。(笑) お手本を示してもやるようにはならないですね、あれは。

谷口 なる場合とならない場合がありますね。

高倉 逆にあれはいやだと思ったりして。(笑)

大井 長男のほうは、何が面白くてあんなことを2人で議論しているのか、間違えても理工学部には行かないって。それは一つの反発なんでは

ようけれども。親を批判的に見るというのはいいことだから。親のことをそのまま信じちゃって、親の真似をされるよりも、批判してもらったほうがいいんでしょうけれども。

高倉 まだ子どもには社会性がないから。価値観はずいぶん違おうだろうし。異常な世界じゃないかと思うでしょうね。

大井 若いころ入った職場で女の人というと研究者はいなくて、みんな事務の女の人だったでしょう。女性だけのたまり場があって、そこに顔を出して私が編み物を始めたらみんながすごくびっくりしてました。あれはきっとわざとやったのね。(笑) 女性であるということアピールするために編み物をしたりしました。私が女性週間誌を一生懸命読んでいたら、へー、そういうのを読むの、安心したと言って感心されたことがありますね。だから最初から別扱いしているわけですね。

松尾 私もよく言われますよ。あそこの研究室に行くとお嫁にいけないって。(笑) やっぱり特殊な社会という見方があって、今の若い人たちには入りにくい社会なんでしょうね。

大井 物理をやるということがちょっと外れたことなのね。

松尾 そうなっているみたいですね。高校のときクラスで物理の授業を取っているというのが、うちの学生に聞くと、3人いましたとか言っていますから。

大井 クラスで3人しかいないんですか。

松尾 そうなんです。進学クラスで女の子が何人かいて、物理を取ったのが私のクラスでは3人でしたとか、その程度の数字なんです。

理学部全体でも少ないでしょう。

宇佐美 生物系は多いです。化学も多いですね。

松尾 やっぱり物理は少ないですね。

大井 なぜかしらね。生物に行くとき何か考えたんですか。

宇佐美 私はわりとミーハーで、大学に入るときは遺伝子工学に憧れたというか、何か新しいこと

ができるんじゃないかと思ったんです。物理とか化学よりも生物はこれからのもののような気がして入ったんです。だから私は大学受験のときに共通一次で生物は取らなかったんです。生物の授業は高校1年のときに受けただけなんですけど、面白いことができそうだなと思ったんです。

松尾 なかなかそういう発想で来てくれる人は少ないですね。

谷口 このごろは男性も生物物理的なことをやりたいという人が出てきました。ちょっと前は生物がきらいだから物理という人が多かったんですけど、最近は違いますね。

松尾 私は入学したときは生物だったんです。それで1年たって物理に替わったんですが、いまだに生物には魅力があります。今のような生物だったら生物にずっといたと思うんですけど、あのころの生物はずいぶん違っていたから、何となく物理のほうが面白いかなと思って。近ごろはまた生物のほうがよかったかなと思っていますけど。

谷口 両方知っていたほうがいいですよ。放射光施設を建設する時は工学部系の人が殆どだから、生物は応用だからという感じで、いざとなると生物系の人意見がなかなか入らないという声があったんですけど、この前、ある研究会に出たときに、物理系の人ですけど、自分ではとてもやると思わない人が放射光を利用した医学生物的研究の開発についてしゃべっていたんです。ほんとうに自分がやっているわけではなくて、そのグループの宣伝も兼ねてでしょうけれども、以前だったらちょっと考えられないことで、ワー、変わったなと思いました。やっぱり面白いことを探しているなということですね。

高倉 あそこを見ていると探せそうな気がしますね。

松尾 いま私はイメージングプレートを使って相変態の時間変化をやっているんですけど、あれはデータが膨大になるので持って帰ってからが大変なんですけど、短時間しかもらえないときにはいい

ですね。生物は生きものですから短時間でできる、ああいう方法はいいですね。

谷口 逆に生物を知らない人でも計測器や物理に強い人が、いい意味で生物に興味を持ちだすと、周りに生物学者が居ますからやりだすとすごく早いです。すぐ追い越しちゃう。計測系に乗せるのはお手のものですから。

宇佐美 バックグラウンドの違う人たちが一緒にグループでやるというのは面白いですね。それぞれ自分が得意の分野があって見方が違うと広がりがありますね。

大井 いま私は男性と一緒に実験しているんですけど、彼はX線が専門、私はレーザーが専門で、一緒にしているとすごく面白いですよ。X線の素人とレーザーの素人が2人集まって実験しているとからかわれたりしているけれども、ずっと同じことばかりやっているのはそれはそれなりに深くいくんだらうけれども、違ったものが入ってくるといろいろ違った角度から見られるし、そういう意味ではとても面白いと思います。

高倉 すごく広くなるというか、放射線生物というのは学問的にそういう性質を持っているんですよ。医学的な側面も必要だし、もちろん物理的な側面も必要だし、化学的な知識がなければできませんし、当然生物ですし、そういうものが全部集まらないと深く究明できないという性質がありますよね。そういう意味では放射光を通じていろいろな分野の方が集まって一つのを追求していくというのは理想的ですね。いわゆる学際的な領域ですね。生物物理もそうだと思いますが。

松尾 1人じゃできないですからね。

宇佐美 これからみんなそういう方向に行くんでしょうね。

谷口 外国ではすでにそういう集まりでやっていますが、日本ではまだバリアが多くて、まだまだ共同研究のやり方がうまいとは思えないけど。

松尾 私は結晶学会の会員でもあるんですけど、結晶学会というとみんなやっているものが違うか

ら、一つの学会としてやりにくいというのがありますね。放射光学会もものが違うとかアプローチの仕方が違うとか、みんなやっていることが違いますよね。今はまだ放射光が新しくてみんなが興味をもって理解しようと思ってやっているうちはすごくまとまったものになると思うのですが、そのうち少しずつ細分化されて、どんどん先端ぼくなってくると集まりにくくなるんじゃないかなという気がして、放射光という共通の光はありますが。

大井 結晶学会なんかだとそれこそ個人プレーが集まれば、ばらばらになるかもしれないけれども、放射光学会は共同の仕事がたくさんあるでしょう。そのへんは結晶学会とは違って、そういうことをやる人が増えればそれに仕掛けて学会の活動も活発になるのではないですか。

松尾 活発にはなるかもしれませんが。共通のものがあるというだけで対象がずいぶん違ってくるだろうと思います。

大井 日本の学会はものすごくたくさんありますね。私は五つぐらい入っていて、もうこれ以上は入れないので、誘われてもずっと断わっているんです。一度入っちゃうと出にくいでしょう。そうすると毎月、本だけでもこんなにあって、ただツンドクだけですよね。どうすればいいのか、長いお付き合いだから思い切ってやめるというものなかなかね。

谷口 放射光の分野は、最初はともかく何かやればデータになるというのがありますよね。その次はもう少しむずかしくなるから同じことを進めていくにももうちょっといい切り込み方がないか探しています。だから女の人もある余地がすごくあると思います。

分子研は名前どおり分子を対象としてその電子状態とか光物性的研究を行なっています。私があついている筋収縮の分子運動はちょっと異色ですね。だから逆にビームタイムをたくさんもらえたのかもしれませんが。もし近寄ったテーマでやっ

ていたら競争もあるだろうし、叩かれもするだろうけれども、悠々とやっているという感じですね。(笑) だけどそういうのも一つの道ですよ。

松尾 化学の人が多いですね。

谷口 化学系が多いですね。だから見方も違います。小さな分子の局所構造に集中しています。私の方はけっこう興味があって、そういうのを取り入れたらいいんじゃないかということがあるんです。

大井 周りの人たちが好意的に興味を持って見ていて、それで時間をたっぷりあげようというわけですね。あそこで長い時間を使ってのびのびとやっているわけですね。(笑)

谷口 ただ上の人と運営していればいいというのではなくて。あれだけのお金を使って何ができたかと、大型装置を使わなくてもいい仕事をしている人はいるのですから辛辣な批判に耐えうるだけのいい仕事をしなければいけないことがあります。そういうところでは女とか男ということが問題になりません。逆に研究の場でこそ女性研究者が入り込める余地があると思います。これから若い人たちが伸びる余地があるんじゃないかと思えます。

高倉 新しいところというのはそういうチャンスが多いんですよ。きちっと築いてもらったところに入っていくんじゃないから。

谷口 そのときに要求されるのはオリジナリティですね。

さっき就職の話が出ましたけれども、あれが重要なポイントではないかと思えます。幸いにしてここにいらっしゃる人はみんな就職していますけど。

高倉 新しい発想を育てていくには若い人がどんどん来れるような条件がなければいけない。優秀な若い人が魅力を感じるような職場でなければダメですよ。どこをどう切り崩していくのかぜんぜんわかりませんが、そういう将来性がないと学問的にも伸びませんよね。

原沢 まずが入った方が面白さとか良さを伝えていけば良いのでしょうか。

谷口 次の人事でやっぱり男性よりもいいんじゃないか、こういう面で伸びたんじゃないかというような実績をつくって、また取ろうという気にさせて……(笑)

原沢 たいへん期待がかかっていますね。(笑)

宇佐美 というよりプレッシャーが……。失敗したら女はだめだって言われちゃいますからね。

今日お話を聞いていて研究自体は女とか男とかという壁はないということなんですけど、就職とか上にあがっていくときにまだあるんですよ。

谷口 それは厳然とありますよ。

松尾 若いうちはいいんですよ。ちょっと色がついてくるとだんだんむずかしくなっていく。

谷口 なおかつ自分のやりたいことがやれる状況じゃないと続かないでしょう。

宇佐美 そのへんの話も聞きたかったんですけど。

高倉 ほんとうの大変さはそこから先だと思えます。就職できることが第1関門で、次にどれだけの我慢とどれだけ続けられるか…。

大井 入って2～3年は調子よく仕事ができると思うけど、それはまだその人の評価につながらないのね。その人が10年後、20年後にどれだけ良い仕事ができているかというところでその人の評価が初めてできてくるわけです。その間に、たとえば子どもを産むとかそういうことが重なってくるわけです。それを乗り越えるのは大変です。周りの人の温かい理解も必要だけど、本人の努力も必要になってきます。

松尾 大事なときが全部重なるんですよ。ちょっと分かれてくればいいのに。

大井 だから輝いているんです。あんまり暇なのは詰まらないでしょう。一度に三つぐらいの仕事が来ると幸せな感じがするんです。(笑)

松尾 馬力のある人が集まりすぎていますね。(笑)

谷口 とにかく足場を作らないとライフワークにはならないんです。だからどんなに条件が悪くても、ちゃんと身を立って研究できる足場を作ることですね。

大井 だけど条件が悪いと続かないと思います。だから最初の条件はなるべく良くして就職しないと、最初から悪い条件だと精神的に耐えていけないんじゃないかと思います。長続きさせるためには正当な条件でスタートしないとだめだと思います。

松尾 昔と違って今は主張できると思うんです。無理なことでなければ相手が気がつかないという部分もけっこうあるから。いろいろ議論をしてだめだと思えば仕方がないけれども、言ってみて何かとっかかりをつかんでいったほうが良いと思います。我慢しているよりもいろいろな人と話をしてみても、こういうことなら可能性があるとか探っていたほうが良いですね。

大井 今だったら女の人をどんどん採ってくれるけれども、昔は会社ではまず採らないし、会社の研究所に入りたいたって殆ど採ってくれない。たまたま採っても仕事はさせてくれるけれども給料は安いし、いつまで同じ仕事をさせてくれるか保証はない。だから、最初の何年かは同じようにできるんだろうけれども、結婚したりすると途端に評価が下がって、あの人には大事な仕事は任せられないとかなんとかくっついてくるんです。今だったら女の方は期待されて入ります。

私の知っているマスターを出た女の方が去年、就職したんです。女の方は初めてというのですごく会社は大切にしてくれて、今度子どもを産むんだけれどもまた大切にしてくれるらしいんです。結婚するときも夫と勤め先がうんと離れていて、最初から別居結婚だったんです。そういうことは昔は考えられなかったけれども、女の方も仕事のために最初から別居したままで結婚する。だから金曜日の夜、会社が終わると夫のほうへ出掛けていく、あるいは夫が妻のほうに来て、2日間楽し

く過ごして、そしてきょうならと日曜日の夜、別れると言っていました。それで今度子どもが産まれたらどうなるんでしょうかって言っているけれど、なんとかやっけていこうとしています。その位いろいろな事がこれからできるようになってきていると思います。

宇佐美 そういう形がべつに不自然じゃなくなってきましたね。交通機関も発達しているから遠くないんですよ。

大井 結婚してしばらくしてその人たちが家に来てアルバムを見せてくれたんですが、写真がいっぱいあって、これはいついつって、新婚旅行を何回もやっているみたいなんです。(笑)週末はいつもドライブでどこかへ行っているんです。楽しそうでいいわねと言ったんだけど、そういう新しい結婚生活が出てきているんです。とにかくこれから仕事をする女の人たちはいろいろな可能性があると思います。

宇佐美 いろいろ選択肢が増えていきますから。

大井 そんなにがちがちにやらなくても大丈夫ですよ。(笑)

高倉 楽しみながら仕事をして家庭を持つことができますよね。

松尾 数年前にマスターを出て会社の研究所に勤めた人がこの前、電話を掛けてきて、いま産休だから論文を書いているんですって言っていました。(笑)

大井 産休をうまく利用しているのね。

松尾 そういうのが可能になったんですね。ご主人と1日交替で幼稚園に行く子どもを送ったり迎えに行ったりしているようです。

子どもができたから会社に近いところに引っ越ししましたと言っていましたけど。(笑)

大井 私も産休に入る前に一度、マタニティドレスを来て学会で講演したいと思って申し込んだことがありますよ。(笑)それはただ趣味ね。(笑)そういう記録を残しておきたいと思って。

高倉 人にできないことを……。

大井 そう。男性にはできないことをやりたいと思って。マタニティドレスを来て講演をする。きつくてストレスがあったらいけないかもしれないけれども、そのくらいならいいだろうと思って。

谷口 私も産休前に北海道へ学会旅行をしましたよ。

大井 産休になってからじゃないでしょう。

谷口 前は1日しか休まなかったから。(笑)

大井 生まれる1日前まで働いていたの？

谷口 ええ。後は休んだけど。

大井 私の知っている方は保育所に預けるために、産休に入ってから自動車学校に通ったんです。お腹の大きい時に授業を聞いて、産んだあと一生懸命実習に通って、それで免許を取ったんです。

高倉 私もそれをやったんです。(笑)

大井 ちょっとふつうじゃ考えられないことをいろいろしでかすわけです。そのくらいふてぶてしくやらないと。

谷口 生まれるとは思わなかったって、男性は。(笑)

大井 このごろお太りになりましたねって。(笑)

谷口 あれにはだまされたなって。私はだましたつもりはないんですけど。

原沢 みんなたくましいですね。

谷口 流産をしないようにとか気をつけはしますが、けっこう動いていていいことがあるし、好きなことをやっている限りはいいんですよ。だから研究が好きになるようになったほうがいいですよ。悲壮感でやっても続かないですものね。

松尾 たしかになんだかんだ言ってもやっぱり好

きなんだなと思うときがあるんです。取り上げると言われたら、やっぱり困るかなって。

大井 研究所時代に私は時々人に言われたんです。毎日好きなことばかりしていていいですねって。時々、ああ、よかったと思うけれども、毎日、楽しい楽しいで仕事をしているわけじゃないんですよ。

松尾 でも代わりのことをしなさいと言われたらそれは絶対困るなと思います。

谷口 楽しみですね。面白いものね、クリエイティブで。

高倉 毎日が同じじゃないというのは絶対にありますね。仕事という感覚はあまりないですね。

大井 仕事という感覚じゃなくて、好きにやっているというのはありますね。

谷口 そういうのは疲れないんです。

大井 単純作業を給料をもらってやったことがないから、どのくらい疲れるのか分らないのね。

松尾 私は学生時代ずいぶん色んなアルバイトをやっていましたから、毎日同じことをやることだけは絶対いやだと思いました。

大井 アルバイトもそういう意味ではいい勉強だったわね。単純作業のアルバイトをやってみて、それに懲りたらもっとクリエイティブな仕事をしようと思ったわけですから。

松尾 何でもいいから毎日違うというのがいいと思いました。1か月ぐらい続けて同じ仕事をするのは恐怖でした。同じ日がないというのがいいですね。

大井 それでは今日はどうもありがとうございます。